慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日吉論文集4
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1959
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.52, No.9 (1959. 9) ,p.799(51)-
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19590901-0051

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

て、長期的に決定される」〔(6) S. 700〕。「簡単にいえば価格は費用を潜在的〔potentiell〕に決定する。実際的〔aktuell〕には費用が価格を決定する」〔(6) S. 701〕。

ボェームの第四の問は労働の価値についてである。「ディーツェルは労働をも、それが市場構成員（被傭者と雇主）によって、費用価値で、すなわち生計費および生殖の費用の総額で評価されるという意味で任意に再生産しうる財として扱うのか」〔(3) S. 522〕。それとも欲望の満足がそれに依存し、また稀少であるがゆえに価値をもつと考えるのか。

ディーツェルは孤立経済の領域においては、将来可能な欲望の満足が労働に依存しておりそれが限定的な量であるために価値を有すると考える。一方交換経済においては「『労働力』という商品の価格は他の商品の価格のように『直接的に』時々に、需要と供給の支配、あるいは市場構成者（使用者と労働者）の主観的評価によって直接的に決定され、『最終的には』、長期には労働者家族の生活、生殖の費用の額に決定される」〔(6) S. 706〕。労働力によって生産された生産物の価格はこの最低賃金に応ずる高さに達せねばならない。すなわち消費者による生産物の主観的価値評価は労働家族の生活、生殖の費用という客観的事実に適合しなければならない。労働力の大部分は任意に再生産しうる交換財である。ただ労働力再生産にはかなり長い時間を要する。だが長期的、最終的には再生産費の法則が労働の価格形成の過程を決定する。

以上のようにボェームの四つの質問に答えた後にディーツェルはつぎのように結論する。「需要と供給の法則は価格と賃金との一時的振動の解明をあたえる。費用法則は発展の大すじの経過を支配する。それゆえに古典派理論は費用法則を価値価格論の中心においた。私は、それが『直接的』ではないが、最終的に勝利をうると信ずる」〔(6) S. 707〕と。

四

以上においてディーツェルの限界効用学派批判と、ボェームの疑問にたいする解答をみたのであるが、その要点は客観的費用価値論にたつ限界効用価値論の批判であるというよりはむしろ客観的費用価値論を主観的価値論に一致せしめることにある。詳細の点はオーストリー学派の反批判とともに取上げることにしてつぎのことだけを指摘しておきたい。彼はまず主観的価値論を需要、供給の法則と同一視する。彼にとっては前者は個人的欲望と財準備の関係であり、後者は買手のグループと売手という財準備を所有するグループとの関係であり、グループで操作するか個人で操作するかは重要ではないと考える。一方においてディーツェルは費用概念を主観化する。費用は費用財が有用であり、また稀少しているがゆえに価値を形成する。労働は一つの有用な、稀少している財であるから価値をもつ。それでは労働の有用性とはなにか。ディーツェルはこれを将来の欲望を満足する可能性としている。ディーツェルは費用が効用

価値を決定するといいながらも一方では費用財の価値は欲望に依存せしめている。かくて彼は「生産財価値と享楽財の価値とは相互に依存する」といわざるをえない。

ディーツェルが任意に再生産しうる財の価値は費用によって決定されるという古典派的命題の擁護者として自任するにもかかわらず、彼の意味する費用は決して客観的な費用ではなく、むしろ主観的価値として考えられているのである。

最後に彼が方法的にも限界効用学派の立場をみとめていることが注目される。彼は価値の法則が先ず消費経済的あるいは内部経済的過程で把握されることがどんな場合にも正しいと考えている。

要するにこの論争におけるディーツェルは、不完全な古典派の基盤を守りきることができず、むしろ限界効用理論とのきわめて不手際な折衷をもとめたということができよう。

三田学会雑誌
三田商学研究　日吉論文集4 —近刊—

ルクレーティウス“物の本質について”（つづき）……樋口勝彦
T・S・エリオットの文学論……上田保
An Investigation of Eight Usages in the Writings of Selected American Novelists ……三浦新市
Philosophical Attitudes in Aldows Huxley's Novels ……海老塚敏男
Annus Mirabilis—コールリッジと「悔恨」（中の上）—…由良君美
二十六聖人殉教史料……佐久間正
Animal Biochrome : The Significance of Pteridine Derivatives in the Pigment Formation in Amphibian Chromatophores……小比賀正敬